

大 博物館

NO. **42**
2004.4

津山郷土博物館

だより



右 隻



左 隻

▲津山景観図屏風 鋏形蕙斎筆 江戸時代後期 (個人蔵)

はじめに

津山城築城400年記念特別展として、鋤形蕙斎展を開催するにあたり、その準備中に蕙斎の津山景観図屏風が津山で発見されるという、信じられないような幸運に巡り会うこととなった。以下、新発見の屏風について簡単に紹介したい。まず、そのデータを示すと以下ようになる。

津山景観図屏風 紙本淡彩 6曲一双 1隻の本紙全体 縦150cm 横358cm

- ・署名 「紹真筆」 右隻第1扇と左隻第6扇
- ・印章 「紹真」 朱字方印

この津山景観図屏風は、全体としては、一見したところ、やや大ざっぱな感じもするが、細かい部分をよく見ると丁寧に描かれており、それぞれの風景の中に適切に配置された人物の描写は、特に優れている。鳥瞰図であるが、視点は余り高くない。江戸一目図のように広範な地域を描くのではなく、限られた部分が対象であることが、視点高度を低くしているのであろう。もちろん、全体を統一的に理解できる視点はない。複数の視点で見た様子をうまくまとめているのである。しかし、描かれた風景全体を見渡すことができるとすれば、その場所は、吉井川南岸の神南備山あたりが想定できる。

右隻は、各所に鮮やかな紅葉が配されており、画面全体の季節は秋である。一方、左隻は桜が咲き誇り、奥山には雪を残す春の情景が描かれる。左右の1隻ずつが、春秋の季節で統一されている。それでは、それぞれの内容について検討してみよう。

右隻 秋の津山城下

画面中央に津山城を配して、その手前に、左から右にゆるやかに流れる吉井川を描く。遠くに霞む山並みと右下に配置された近景の里山によって、津山城を中心とする空間の広がりや奥行きが表現

されている。更に、吉井川は左から右へと流れるだけではなく、右奥の山あいを縫って遠景へと消えていくことによって、更に画面に深みを与えている。

右隻の中心となるのは、やはり津山城である。中央の第3扇・第4扇に亘って、豪壮な石垣の上に建つ櫓や天守が描かれる。5層の天守は、特別な強調や余分な装飾もなく、実際の姿に忠実に描かれている。殊に、最上層の板張りや切りつめられた板庇などまで描かれていることは、注目に値する。備中櫓を初めとして、その他の櫓の位置や向きなどもほぼ正確に描かれており、実際に城を見たものにしか描けない絵である。

その麓には津山の城下町が広がり、密集する家並みが薨を連ねている。城と城下町とは、堀と土塁で区画されていて、堀の内側に巡らされた土塁には多くの松が植えられていた。そのため、土塁に松葉拾いにやってくる町人がいたり、松の枝には、カラスや鶉が集まってきていたという。第4扇の中央に描かれる京橋門の左右には、こうした松の大木が連なる様子が見えている。

第3扇の中央右側付近には、木立の向こうに宮川大橋が描かれ、高欄を持つ板橋の上を行き来する人物が配されている。

城下町の南を西から東に流れる吉井川に架けられた今津屋橋（当時は鍛冶場橋）の北詰には、城下町を区切る関貫があり、その東脇には高札場が見える。今津屋橋の下手には、藩の船蔵があり、土手道の北側には長い大きな建物が描かれる。これは、川戸御蔵と呼ばれていた藩の米倉で、東西二棟の蔵に大量の年貢米が保管されていた。

この屏風では、蔵から米俵を運び出している様子と、米俵を満載した高瀬舟が川を下っていく様子が描かれているが、今津屋橋の上に目を遣ると、対岸の村から、俵を積んだ牛を引いて城下を目指す人の姿も見えている。その下方に目を移せば、稲刈りをしているらしい農民の姿がある。

第5扇の中央付近には、田園地帯に浮かぶ島の

ように庭園と館が描かれる。これは、当時御対面所と呼ばれていた松平家の別邸で、現在では、衆楽園として市民の憩いの場になっている。その少し下方の町中に大きな瓦屋根が見えており、これが妙願寺と思われる。

妙願寺から西は、土手の竹藪に視界を遮られているが、津山の城下町は、本来はこのような竹藪で遠くからは見通せないようになっていた。

竹藪の下の河原には水車小屋が描かれる。のどかな農村風景の如くであるが、吉井川の河原に引かれた水路を利用しているのである。

第6扇下方に描かれているのは鉄砲町の大砲場の様子である。『津山誌』によれば、城下の大砲場は三枚橋の西にあり、元禄以後、松平氏の家臣が砲術の練習をした場所と伝えられている。ここから、吉井川南岸の大谷村石山に向かって射撃を行ったのである。その距離が約5町あることから五町場とも呼ばれていた。

この大砲場の右下には菟田川に架かる三枚橋が描かれている。わら束のようなものを担いだ人物が、3つに分かれた岩場を渡っているように見えるが、ここは大きな3枚の岩を架け渡した橋で、そのため三枚橋と呼ばれていたのである。蕙斎の描写の正確さが現れている。

三枚橋の上方、竹藪の向こうに見える、檜皮葺きの建物が、城下町の総鎮守とされた徳守宮である。筆の向きで瓦屋根と檜皮葺き屋根を描き分けている。

左隻 春の二宮

左隻には、広瀬橋の向こうに二宮の松原が高野神社付近まで続き、鬱蒼とした木立の中に高野神社の古い姿が描かれる。画面のほとんどは緩やかな山並みが占めていて、里山が広がるのどかな情景が描かれている。一方吉井川は、左手奥から蛇行しながら流れ出て、松原を背景にして右へと流れていく。桜の咲き誇る里山の山並みの奥には、今だ雪を戴く泉山が遠く描かれ、さりげなく山国の春を演出している。

第1扇の下方に描かれる広瀬橋は、津山城下と備前とを結ぶ備前往来に続く橋で、明治以降には、

国道整備に伴い、吉井川の上手に架けられた境橋にその役割を譲った橋である。橋の名は、この付近の瀬に付けられた広瀬という名に由来しており、浅瀬に細かく波立つ様子が描かれている。今津屋橋付近の水屋のある流れとは、明らかに描き分けられているのである。

第2扇の松原が始まるころには、紫竹川に架かる筋違橋が見える。ここが、津山城下町の西の端である。第2扇から第4扇にかけては、みごとな松並木が描かれ、松並木から続く視線はそのまま高野神社の森に行き着く。

高野神社参道の大鳥居に覆い被さるように見える大木は、宇那提森のムクノキであろう。現在の樹齢700年といわれている。かつてこの付近に広がっていた広大な森のなごりといわれている。鳥居の奥には高野神社の隨身門がある。ここには、平安時代末期に製作された木像隨身像一対が安置されていた。現在、その隨身像は、国指定の重要文化財として管理されている。

高野神社の左手には、吉井川に衝きだした岩場があり、二人の人物が川をのぞき込んでいるように見える。ここは、天王ヶ鼻と呼ばれる岩場で、吉井川が突き当たってその流れを変えている。そこから吉井川を少しさかのぼると、第5扇中央付近には、かすかに清眼寺の瓦屋根と、院庄の古跡が見える。院庄は、後醍醐天皇と児島高德の伝承で知られる場所で、森藩時代の貞享5年、森家の重臣長尾勝明は、故事の顕彰のために石碑を建立した。そして、第6扇、吉井川の対岸には、古来の歌枕と推定される嵯峨山が、その存在感を示している。

おわりに

ここまで、屏風に描かれている近世の風景について、歴史的な事実と照合しながら大まかに見てきたが、その内容が、当時の津山を知る上で、この上もなく貴重な描写であることは明らかである。この津山景観図屏風が、蕙斎の作品としての美術的な価値のみならず、津山の近世史研究において有する資料的価値は、極めて大きい。

(尾島 治)

平成16年度 博物館行事予定

行事名 日程	展 覧 会	町奉行日記を読むVI 古文書講座	飛鳥の古代史 古代史講座	夏休み子供歴史教室 弥生土器をつくる	文化財めぐり (友の会)
平成16 3	津山城築城400年 記念特別展 鍬形蕙斎 3/20 4/18				
4					
5		●5/13			●5/16
6		●6/10	●5/27		
7		●7/8	●6/24		
8			●7/15	●7/22 ●7/23	
9		●9/9		●8/13	
10	津山城築城400年 記念特別展 戦国武将 森忠政 10/9 11/14	●10/14	●9/23		●9/19
11		●11/11	●10/28		●11/7
12			●11/25		
平成17 1		●1/13	●1/27		
2		●2/10	●2/24		
3	特別展 津山松平藩と家臣団(仮称) 3/19 4/24	●3/10	●3/24		●3/13
4					

博物館入館案内

- 開館時間：午前9：00～午後5：00
- 休館日：毎週月曜日・祝日の翌日
12月27日～1月4日・その他
- 入館料：一般 210円(160円)
高校・大学生 150円(120円)
中学生以下 無料
※()は30人以上の団体

博物館だより No.42 平成16年4月1日発行

編集・発行：津山郷土博物館
〒708-0022 岡山県津山市山下92
☎(0868)22-4567 ㊟(0868)23-9874
E-mail: tsu-haku@tvtnet.ne.jp

印刷：(株)廣陽本社

● は津山松平藩の検印で剣大といい、現在津山市の市章となっている。